

ちょっと内側から見た IEEE Nuclear Science Symposium-Medical Imaging Conference (2013 IEEE NSS/MIC/RTSD)

神野 郁夫

Kanno Ikuo

1. ことの始まり

2010年12月、KAIST (Korea Advanced Institute of Science and Technology) の G. Cho からの電話。「2013年のIEEEで自分がNSS Chairをやるので、あなたはDeputy Chairをやるのか?」。IEEE NSS-MICには、2004年のローマに行ったのみで、実は馴染みがなかったが、気軽に引き受けた。ひと月後にソウルでの国際ワークショップで話すことも了解した。せっかくのビジネスクラスが関空-仁川と短距離で残念ではあったが、数日間の滞在、全てが招待であった。

この時点で私的に開催していた“放射線物理学研究会”が後に応用物理学会放射線分科会の研究会となり、さらに2012年には日本学術振興会の産学協力研究委員会“放射線科学とその応用第186委員会”に成長した。186委員会の設立目的の1つに、国際会議の招致がある。

2012年5月、翌年のIEEE NSS-MIC実施のため、現地委員の会合がソウルで開催され、(独)放射線医学総合研究所の山谷泰賀氏とともに参加した。ソウルに滞在した5日間、韓国人研究者のまとまりの良さとIEEEの欧米役員たちと彼らが議論する様子を見て、山谷氏ともども、日本にIEEEを招致したい、という思いが湧いてきた。またこの時、オーストラリアのWollongong大学のA. Rosenfeldから、山谷氏ともども2012年12月のワークショップに参加

を誘われた。そこには、次期アジア開催のためメルボルンとシドニーを視察したIEEE役員4名も出席していた。Rosenfeld自身もIEEEの役員を務めており、学会関連あるいは西洋人同士の繋がりを感じた。

2. Japan Night

186委員会においてIEEEの次回アジア開催に日本が立候補する了解を得、2013年ソウル会議においてはそのノウハウを学ぶ、という戦略を立てた。

まず、韓国が招致に成功した原因は、ハワイ会議におけるKorea Nightと聞いた。これは韓国人研究者が集まり、IEEEを韓国で開催できない理由はない、と決起した会合である。では、我々もJapan Nightを開催しよう。幸い、山谷氏と私が現地委員であり、韓国人秘書のS.-I Kimに会場の手配、ケータリングの打ち合わせ先などを問い合わせることができた。

会議の期日が近づくに連れ、Japan Nightの具体化を急いだ。賛同企業に援助をお願いし、参加者の負担を軽減し、会議会場のCOEX (Convention & Exhibition Center) の一部屋で立食パーティを開催する。初めは賛同企業数も少なく、極端に飲み物が少ない会合になってしまう心配があった。しかし、期日が迫るにつれ、企業から援助の申し出も増え、また国土交通省観光庁から山谷氏に国際会議誘致に関するアン

バサダーの依頼があり、一挙に展望が開けた。

Japan Night を月曜の夜に開催し、30 名を超える日本人と IEEE 関連の役員及びソウル会議 General Chair の H.-J. Kim 夫妻, Cho 夫妻, MIC Chair の J.-S. Lee 夫妻など、20 名近い外国人を迎えることができた (写真)。

2014 年以降、どのように Japan Night を継続するかが、現在の課題である。

3. Deputy Chair

トピックの設定, コンベナ (Convener) の選定などの仕事がある。Cho にほとんど任せたが、会議の背景, 呼び掛けなどを英語で記述するのは、論文を書く技とはまた異なることを知った。コンベナの仕事は、担当するトピックに投稿された論文の査読をレフリーに割り振ることだ。数十件の論文の査読を頼むのは至難と覚悟していた。しかし、発表論文が多数の IEEE では、準備万端であった。レフリー候補者が何十人もリストされていて、論文を3名のレフリーに適当に割り振り、レフリーがそれを読んで、オーラル, ポスター, 却下と分ける仕組みだ。レフリーの専門など無関係に割り振ることに驚いた。しかし、このような仕組みでない限り、2~3 週間で膨大な数の論文を処理することは不可能だ。レフリーの判断をコンベナがまとめ、発表の範疇を決める。2名のコンベナが相談しつつも、これも機械的な作業である。本会議の論文リジェクト率の目標は10%である。しかし、会議初日の Cho による報告では、4%であった。

Deputy Chair の役割で更に驚いたのは、却下された論文をせめてポスターにしてほしい、というような連絡が次々と来ることだ。「3名のレフリーのうち、2名が却下と判定したので」と断った論文が、いつの間にかポスター発表になっていたりする。

現地委員と IEEE 役員との連絡のため、ウェブ上に Base Camp という掲示板が設けられた。個人が対応に困る問い合わせや会議運営方法などに関して、情報を共有することが目的である。毎日のように新しい掲示があり、それについて意見が述べられる。私は Deputy でもあり、またしばしば長文の英語なので、熱心に読んだわけではない。ただ、議論が紛糾すると General Chair の Kim が調停するのが常であった。こういう点は、欧米に留学経験がある研究者が多い韓国に有利な点と感じた。

4. IEEE

Institute of Electrical and Electronics Engineers の略である。一方で、I eat, eat, eat. の略という説もあるように、本会議ではパーティが多い。今回は、10月27日(日)Committee Dinner, 28日(月)NSS Luncheon, 29日(火)Exhibitor Reception, 30日(水)Conference Reception, 31日(木)General Chair's Reception, 11月1日(金)MIC Dinnerがあった。さらには、付随する委員会でランチ付のものもある。これらのうち、Committee Dinner, General Chair's Reception は、IEEE 役員及び現地委員などに制限されている。私は Deputy Chair なのでほとんど参加したが、



ジャパンナイト終了時の集合写真

しかしその分は、働かされた。

この会議はパラレルセッションが多く、多数の座長が必要である。私は初日月曜日に開幕セッションの座長が当てられ、同日はほかに2回、座長を担当した。1週間に4つのセッションの座長が当たった。

英語ネイティブと思われるほかのセッションの座長を見ると、会場から質問がない場合でも平気で次の発表に移る場合もあり、無理に質問しなくてもよい、と気軽に感じた。ご存知の方も多と思うが、国際学会とはいっても会場からの質問の内容は、我々が出席する国内学会と同様のレベルである。単に自分が知らないことを聞くだけの質問があることも、国内学会と同様である。英語は他国語であり、我々が不得手なのは当たり前なので、どんどん下手な英語で質問することが望ましい。英語がネイティブの人たちは、こちらの言いたいことを分かってくれる。

5. 日本への招致活動

IEEE NSS-MIC は元来、米国で開催されていたが、近年、数年に一度、欧州で開催されている。さらに遠隔の地、アジアで開催されたのは、このソウル会議が初めてである。ソウル会議の現地委員となり、IEEE 役員たちと多少、顔見知りとなったことは、開催地に立候補する演説を木曜日に行う際に、心強かった。

IEEE 役員4、5名と、次期ヨーロッパ開催に立候補するイギリス人、そして次期アジア開催に名乗りを上げているオーストラリア人と日本人の合計10名程度が小さい部屋で各候補都市について、利点を述べる。我々と利害が対立するオーストラリア招致のため、Rosenfeld が3つの都市について熱弁をふるった。日本としては、横浜と京都が候補地である。まず、山谷氏が日本全般と横浜の説明を行い、続いて私が京

都の魅力を紹介した。最後に、日本について Johns Hopkins 大学の田口克行氏が再度、解説した。

説明会場を出た場所で、Rosenfeld 及び Deputy General Chair の S. Meikle (オーストラリア人) から、「日本が開催地に選ばれたら、オーストラリアは協力する」との申し出があった。我々も同様の提案を行い、共にアジア開催に協力することとした。

ソウル会議の翌週、4名の IEEE 役員が来日し、パシフィコ横浜と京都国際会館を視察した。京都視察に当たっては、(株)島津製作所、(株)堀場製作所からの全面的な援助をいただいたことを記しておきたい。

IEEE から各候補地に関する調査シートが2014年1月末に届き、これを2月半ばに回答した。2月中に IEEE 内部で議論を持ち、10月に2018年のアジア開催都市が決定される予定である。

6年ほど前、ソウルがアジア開催の候補地として立候補する際、日本でも名乗りを上げる機運があった、と聞いた。しかし、全日本として行動を起こすまでには至らなかった。今回、日本学術振興会第186委員会が設立され、これを母体に高エネルギー物理分野など、国内の様々な研究分野に声を掛け、日本招致への了解をいただいた。日本の IEEE NSS-MIC における論文発表件数は3位である。会議関連の企業も多い。

本稿を書いている今はソチオリンピックの最中である。日本選手の活躍はうれしい。同様に、日本で IEEE NSS-MIC 会議が開催されれば、少し離れた分野の研究者も喜んでくれると思っている。東京オリンピックよりも一足早く、日本 IEEE NSS-MIC 会議が開催されることを期待している。

(京都大学大学院工学研究科)